

プロローグ

●——舞台

日本の地方都市『備上八幡市』。総人口3万5430人、うち1万6544人が市街地に住む。東西は延々と山々が続き、山一つ越えるたびにわずかな盆地に小さな集落が点在しており、人口の半分はこういった山間部の集落に住んでいる。

日本海側となる北部は標高1000〜3000メートル級の山脈がつらなり、冬にはしばしば交通が遮断される。列車で2時間・15駅ほど奥深い谷を抜けて走れば、南の平野部に出る。平野部には人口200万人を超える政令指定都市『名古屋市』がある。

●——自然

南北の山を貫くように水量豊かな清流『八幡川』が流れ、その支流となる『高梁川』が市街を西から東へと線を引く。溪谷状の川には鮎が豊富に生息しており、鮎の甘露煮は猪肉とともに、この地方の特産品となっている。

●——歴史

この山間部の、わずかに開けた平野に進出したのが戦国大名の遠藤氏。敵対する豪族から『虎伏山』に築かれた砦を奪い、その地に『備上八幡城』（別名『霧ヶ城』）を築き、居城としたのが今から450年前——。城は幾度となく戦乱に見舞われるも、戦国時代を通して遠藤氏が支配した。

その遠藤氏も関ヶ原の合戦で西軍につき、一日にして敗れ、敗戦後この地を追われた。遠藤氏に代わって入城したのが倉板氏である。

倉板氏は明治の廃藩置県までこの地を平和に治めた。明治時代になると、廃城令により、取り壊しを命じられた城は天守閣、他一部の櫓を残して撤去された。戦後、昭和の築城ブームで門や櫓などが復元される。

こうして現在の備上八幡城は観光名所として新たな役割を与えられ、毎年秋に行われる備上八幡時代祭りには、戦国時代の勇ましい甲冑を着こんだ武者行列が市内から城までを練り歩き、大勢の観光客で賑わうこととなった。

現在、山頂部の天守群は公園として整備され、藩政期に藩主の居館と政務のための麓の城郭跡地には『県立備八高等学校』が建てられている。

第一章 終わらない放課後、終わる世界

第一節 「馬上少女過ぐ」

午前7時、2両編成のローカル線。通勤・通学の時間帯だが、都市部の電車に比べれば、混雑しているというにはほど遠い。電車が揺られても、お互いの肩が触れ合うこともなく、車内には穏やかな時間が流れている。それでも、ここ数日、流行の兆しを見せ始めているインフルエンザを心配してか、マスク姿の乗客がちらほらと目につくようになった。

乗客の多くが電車の揺れに何をするでもなく身をゆだねる中で、座席で一心に読書に勤しむ女学生がいる。備上八幡市内の県立備上高等学校に通う高校生で、名前は【遠山マリ 2年A組 放送部】。

市内から遠く離れた村に育ち、自転車と列車を乗り継ぎ通学している。二つに分けたお下げ髪を胸の前まで垂らし、眼鏡越しの瞳は手に持った文庫本に鋭く注がれていた。この年頃の女子高生が普通、車内ですることといえば、試験前だと参考書、そうでなければケータイいじりか読書であろう。それも漫画か恋愛モノが相場といつてよさそうだが、この遠山マリが手にしている文庫本のタイトルは、ずばり『森尾太平記』。戦国時代を通して活躍した森尾一族を書いた軍記物である。

彼女はそれをむさぼるように読んでいた。しかも、遠山マリがこの本を読むのはこれで、3周目であることを付け加えておく。そう、彼女は大の歴史好き、戦国武将好きの、いわゆる「歴史女」と世間では呼ばれる存在なのである。

備上八幡城に押し寄せた森尾勢8万の大軍と遠藤親子が対峙する場面が、彼女がもつともこの小説で好きなくだりで、興奮したときの彼女の癖で、ついボソボソと音読してしまう。

「殿お、早くお逃げくださいませ！ ここは我々が……」

そんな彼女を隣のスーツ姿の男性が、怪訝そうにチラチラと横目で見やる。

「川口く、川口く」

やがて列車が、備上八幡駅一つ手前の川口駅に停車した。車両のドアが開き、何人かの乗客が乗り込んで来る。

「義を通さぬ、森尾家の将来は暗い！」

少しづり落ちた眼鏡を右手で直したマリに、ラクロスのラケットを肩に掛けた少女が声を掛けた。

「マリ！ おっはよ、何読んでるの？」

お気に入りの場面で、列車が川口駅に止まったのも気づかなかったマリ。慌てて文庫本を膝上の鞆の下に差し込んだ。

「サ、サトミ！ お、おはよ」

サトミと呼んだ美少女の出現に、マリは動揺した。この女の子はマリの同級生【南総サトミ 2年B組 ラクロス部】。

サトミは2年生になって、A組のマリとは別のクラスになったが、1年生の時は同じクラスだったため、マリとも比較的仲が良かった。

とはいえ、彼女はマリと違って明るくお洒落。おまけにパツチリお眼目にスラリとした容姿の

持ち主。男子を魅了し、カラリとした性格は女子からの評判も良い。正に八方美人の、学園のアイドルなのである。

「こ、これね、何でもないので。ちょっと昔の青春ものだから……」

とつきにごまかしたマリ。自分が歴女、つまり歴史大好き女子だということは、誰にも知られたくはなかった。クラスではごくごく普通の存在であり、必要以上に周りから浮きたくないと思っているのである。

「そう……。『義を通さぬ森尾家の将来は暗い』とか何とかぶつぶつ言っていたようだったけど？」

サトミはさほど興味もなさそうに、ひよろりと一本だけ伸びた三つ編みを人差し指でいじりながらマリに尋ねた。

「あ、あれはねっ、そ、その、」

必死で弁解をしようとしたマリをよそに、サトミの表情が途端に、コロリと乙女の表情に変わった。彼女の視線は先頭車両に乗り合わせていた一人の男子の姿をとらえていた。ドア脇に立ち一人寂しそうに……。正確には、『話しかけるな』のオーラを放っている。耳栓代わりのイヤホンで、音楽を聴きながら遠く車窓から流れる景色をうつろに眺めている。

「明智くん、今日もカッコいいな」

そうサトミが少し頬を赤らめながら呼んだのは【明智ヒカル 2年C組 陸上部(幽霊部員)】。県内屈指のスプリンターで将来を期待されていたが、二年の夏、突然走ることをやめた。生来の寡黙な性格で、周りと距離を取るため素っ気ない態度を演じるが、その端正な顔立ちと切れ長のキリッとした目つきが女子たちのハートを離さない。今は家庭の事情により親戚宅から通学している。

「明智くんって、他の男の子と違って、大人びているというかあ、孤独でいつも遠くを見ているあの目を見るとねえ、ギョッと抱きしめたくなるの！ マリもそう思うよね？」

サトミの振り回すカバンがマリの横に座る男性会社員の膝にバシバシ当たり続けていたが、サトミは少しも気に留める様子もなく同意を求めた。

「うくん、そうかな？ 私には何か腹黒いものを隠しているとか思えないんだ」

否定的に答えたマリに、サトミは余裕の表情をしてみせた。

「マリは恋愛には向いてないからわからないのね、きっと」

平静を装ってはいたが、マリはその言葉に少し傷付いていた。

「今は勉強のほうが大事だから、恋愛しないだけ、だもん……。第一、明智という名前が気に食わないのよっ。私は……」

そう言って、急に不機嫌な表情を浮かべるマリ。尊敬する織田信長を討った張本人、明智光秀と名前が同じだからだ。

「何それ？」

サトミは怪訝そうに頭を傾げると、ふたたび隣車両の明智を恋する乙女の眼差しで見つめた。否定はしたものの、実はマリにとっても明智は気になる存在であった。そして、密かに彼を見つめた。

ふいにサトミがマリのほうに向き直った。マリは気づかれないように、すかさず明智から視線を外した。

「決めた！ 私、明智くんに告白する！」

「えっ？ て、今日？」

驚いた表情でマリはサトミに聞き返した。早鐘を打つマリの心臓。サトミは明るく美人で友達も多く学校のアイドル的存在。そんなサトミから告白されて断る男子などいようはずもない。

「それでね、マリさま。お昼休みにはあの曲を流してほしいの」

お願いのポーズでウインクをしてみせるサトミ。

「あの曲”って、曲が流れている間に告白すれば、恋愛が成就するっていう噂のアレ？」

放送部のマリは2日に一度、お昼休みに選曲をして流すのが役割となっている。

「そそ……先月、木下さんがそれで成功したって聞いたわ！ あの地味な木下さんが、C組のイケメンの竹中くんとよ！」

サトミの通学用カバンは相も変わらず男性会社員の膝を叩き続けていたが、サトミの愛くるしい容姿に抗議の声すら上げないスケベ心の会社員。夢中でおしゃべりするサトミの声に、列車がまもなく備上八幡駅に到着するというアナウンスが重なった。

山間を抜けると、車窓の風景が一変して、朝日に輝く市街地が姿を現した。うっすらと朝もやのかかった市街地の向こうから、虎伏山が顔をのぞかせている。山の頂上に築かれた備上八幡城の四層の白漆喰の天守閣が秋晴れの澄み切った青空に、見事にくつきりとその輪郭を浮かび上がらせ、輝いていた。

八幡川に架かる鉄橋をゴトンゴトンと、音を立てて渡り切った列車が、スピードを落として備上八幡駅へと進入し始めると、サトミはうつむき加減のマリに声をかけた。

「マリ、着いたよ！」

列車はホームに到着し、荷物を抱え乗客たちがドア前へと歩を進める。

「私……………」

何か言おうと口ごもったマリはおおざとサトミを見上げたが、さっきまで目の前に立っていたはずのサトミはすでに列車から降りていて、駅プラットホームの人ごみに混ざっていた。

「いけない。降りなきゃ」

サトミの後を追って、慌ててマリが座席から立ち上がったその拍子に、鞆の下に隠した『森尾太平記』がポトリと床に落ちた。それを隣の席に座っていた男性会社員が拾い上げた。

「ちよつと、昔の青春ものね……」

マリとサトミの会話を聞いていた会社員は、皮肉まじりにニヤリと笑い、マリへと差し出した。

「あ、ありがとうございますっ！」

頬を赤く染め上げたマリは、素早く本を受け取ると、そそくさと列車を飛び降りた。

改札を出たマリはサトミの姿を探したが、サトミはすでに徒歩で通学する数人の女子グループに合流していて、その輪の中心で歯並びの良い白い歯を惜しげもなく露出させ、「キャッキヤ」と笑いながらおしゃべりしていた。

「はア……」

サトミの自由奔放さに、マリは深いため息をつき、肩を落とした。

駅から高校まではさらに30分ほど歩かなければならない。この時期3年生は受験や就職活動で登校しない生徒も多く、登校する生徒全体の姿はそれほど多くない。

うつむき加減で一人歩きだしたマリは突如、後ろから肩を叩かれた。「うん？」と振り返ったマリの前には、明智が突っ立っていた。

「え、えっ？」

大混乱状態のマリ、できれば逃げ出したい。

「お前、遠山だろ？」と、明智は抑揚のない声で確認するように尋ねた。

「ハ、ハイ！」

私の名前、知ってたんだ……。マリは嬉しくなった。それもこれ以上にないくらいに。

「これ、改札で落としたりだろ？」

そう言うとき明智は、マリの定期券入れを素っ気なく差し出した。

「あわわわ……」

慌てて鞆を確認する「ふり」をしたマリ。

「うん、私のみたい……」

落とし物を届けてくれただけとわかって少し肩を落としたが、マリは緊張で手を震わせながら、明智から差し出された定期券入れを恥ずかしそうに受け取った。

「お前、そういうの興味あるのか？」

「え？ 何が？」

ふいに尋ねられた一言にマリは困惑した。

「定期券入れの裏のヤツ」

明智が面倒くさそうに答えると、マリは慌てて定期券の裏に目をやった。そこには戦国武将の家紋シールが貼り付けてあった。

「あ……」

穴があつたら入りたいとはこのことだ。しかし、すぐに明智から意外な言葉が飛び出して、目を丸くした。

「好きだぜ」

明智ヒカルがさらりと言ったそのセリフに、マリは生まれて初めて心臓をギュッと掴まれたような感覚を味わい、戸惑った。

「え そんな、いきなり告白されても……」

顔を真っ赤にしたマリは、目のやり場に困ってうつむいた。数人の女子生徒たちが、マリと明智のふたりのほうを横目で見ながら通り過ぎて行く。

（何？ この苦しいほどの胸のときめきは……もしかしたらこれが、恋愛マンガなんかに出て来る、恋する乙女の「キュン」ってヤツかもしれない！）

「いや、それ……」

マリが何か勘違いをしていると気づいた明智は、人差し指でマリの定期券をちよんちよんと指差しながら言った。

「それ、織田家の家紋「織田木瓜」だろ？ それ、好きなんだよ」

「え？ ああぁ」

自分の、ほとんど妄想に近い勘違いに気づいたマリは、気恥ずかしさからか両手で顔を覆い、一気にしゅんと縮こまってしまった。

そのわかりやすいリアクションに、明智は無表情を装いながらも、思わず「フツ」と鼻で笑ってしまった。明智をよく知る者なら、この数年、彼が笑った姿を見たことがないと証言するだろう。

「お前、面白いヤツだな」

口元に笑みを浮かべていた自分に気づいた明智は、すぐさまそれを意識的に消した。いつもの

仏頂面に戻った明智は、ところで……と前置きをしたあと、縮こまったままのマリに質問した。
「なあ、俺たちの校章、変に思ったことないか？」
「えっ、校章？」

唐突に奇妙な質問されたマリはおおおと顔を上げると、そのまま左肩をぐいっと頬に近づけ、制服の上腕に付いた校章を見つめた。

「子持ち亀甲に、三つ剣竜胆、よね？ たしかに高校の校章としては古めかしいし、今風だとは思わないけど……」

腑に落ちない表情を浮かべながら、マリは真意を確かめるように明智へ顔を向けた。

「何で六角形なんだ？ 校名に備八とついているんだから、八角形にしてもいいじゃないか？」

「三つ剣竜胆」などとすら言えてしまうマリに感心しながらも、バカげた質問を自分がしているようで、明智はバツの悪い顔をした。

そんな明智とは対照的に、マリはとても素敵な質問を投げかけられでもしたかのように、目を輝かせ始めた。

「たしかに隅み切り角を採用すれば、ちょうど八角形になるのに……。何か理由があるのかもしれない……」

あれこれと考え始めたマリの横顔を、明智は不思議なモノを見るかのような目つきで見つめた。普通の学生であれば、自分たちの校章の由来など気にも留めないのに、それを変だと思った明智とその質問の答えを真剣に探そうとするマリ。こうしてふたりは、八幡城麓に建つ学校までの30分の道のりを一緒に歩いて行った。

しかし校門が近付いてくると、急にマリは明智とふたりで歩いていることを意識し始めた。周りのみんなから注目されているようで恥ずかしくなったのだ。

「私、ちょっと郵便ポストに寄りたいから、先に……」

急によそよそしくなったマリはとっさに嘘をついて、明智から離れようとした。

「そうか、じゃ」

一言、そうマリに告げた明智は名残り惜しさなど微塵も見せずに、前方へと向き直ると、校門に向かって歩いて行った。

歩き去る明智の背中を見ながらマリは「はあ〜」と肩の力を抜いた。こんな奇跡は二度と起こらないかもしれないのに、それを自ら手放してしまったことに少し後悔した。

しかし、それ以上にマリの心は満たされていた。

「彼とふたりつきりで登校しちゃった……。カレ！」

校門前の横断歩道で信号が変わるのを待つマリの手のひらは、緊張で汗びっしりだった。

「おはよう……」

「カレ……シ……」

「マリちゃん、おはよう……」

二度目にしてようやく、自分の名を呼ぶ声に気づいたマリ。

「シ、シズちゃん！ いつからいたのお？」

背後から不意打ちを食らったかのように、マリは上半身をのけぞらせた。

シズちゃんと呼ばれた清楚な少女は【那須シズカ 2年C組 学級委員長 弓道部部长】。

「越後商店の辺りから……」

自分の身長を遙かに超えた2メートル長の弓袋を肩に据え直し、シズカはおしとやかに答えた。

弓道をするための長い黒髪を抑える漆塗りのカチューシャがシズカのトレードマーク。マリと気が合い、マリよりも大人しい。学校内では「辞書で大和撫子と調べてみれば、シズカの写真が載っている」という冗談話があるほどだ。

「気づかなかったわ」と焦るマリ。「明智くんとは何でもないのよおー。ただ定期を落として、それを拾ってくれてえ……」と聞かれてもいないのに、普段より1オクターブ高い調子で必死に弁明を始める。

「そう……。でもふたり仲良さそうに見えたよ」

いつも、まるで母親のような優しい口調のシズカ。

「そ、そう？……ハハハア」

ハニカミながら笑ってみせるマリ。

(なんて分かりやすい性格なのかしら……)

シズカはまじまじとマリの顔を見つめた。

信号を渡ると毎朝、「はい、おはようっ！」という野太くバカでかい声を聞くことになる。校門前に仁王立ちし、登校する生徒に挨拶をしている先生は【大岡越後 生活指導】。少し肌寒い秋の朝にもかかわらず、鍛え上げられた上腕筋を半袖口からむき出しにしている。身長198センチの巨体で「俺が校則だ！」と公言してはばからない。熱血指導を自認し、生徒の不正な行いには容赦しない。

「そこおー、うつむかず、上を向いて歩け！ 上を」

男子生徒からは「お奉行様」と揶揄され嫌われているが、その熱い指導ぶりに恋心を抱く女子生徒もいるという噂。

マリとシズカはいつものとおりに笑顔で挨拶をして校門をくぐった。